

シナイ通信

第44号

令和6年6月30日

NPO法人 シナイモツゴ郷の会



TEL 090-1377-2844

MAIL kiyotaka.totosh@gmail.com

WEB <https://www.shinaimotsugo.com>

〒989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚字

小谷地 504-1 鹿島台公民館内



目 次

ページ

表紙	アメリカザリガニ退治により復元したタガイ（左）と調査風景（右） （旧品井沼周辺ため池群、2024年3月）	事務局	1
2024年上期（1～6月）の活動概要		事務局	2～3
20年間の活動成果と今後の取り組み（2分間スピーチ）			
大崎市世界農業遺産推進会議アクションプラン委員会（2月6日）にて	高橋清孝		4-
4年ぶり会場開催 令和6年度総会（2月18日） 新役員の選出など	浅野 功		5
シナイモツゴ里親活動：稚魚回収、卵から飼育開始、特別授業で豊かな自然の大切さを学ぶ 気候変動により産卵時期が変動、卵提供時期の再検討が課題	高橋清孝		6
シナイモツゴ放流会 鹿島台小と小牛田小等の里親が計400尾を放流	根元信一		7
水辺の自然再生ミニシンポジウム・地域研修会（2月17日） アメリカザリガニとブラックバス退治の成果と課題	事務局		8～12
理事就任のご挨拶	君島裕介		12
J-STAGEへのシンポジウム要旨の登載について	君島裕介		12
移動研修会（5月18日）陸前高田の貝類博物館と震災遺構を訪ねる	長谷川政智		13～14
アメリカザリガニ退治に参加して	宮路憲昭		15
水辺の仲間たち -その28- ヒツジグサ	佐藤豪一		16～17
シナイモツゴBCC通信の紹介	事務局		18

世界農業遺産「大崎耕土」と連携し里山ため池の生態系を復元

旧品井沼周辺ため池群が 30 by 30 自然共生サイトに認定

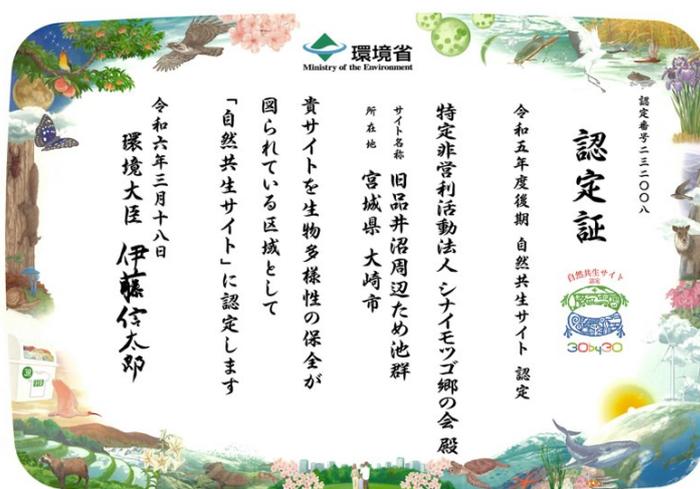
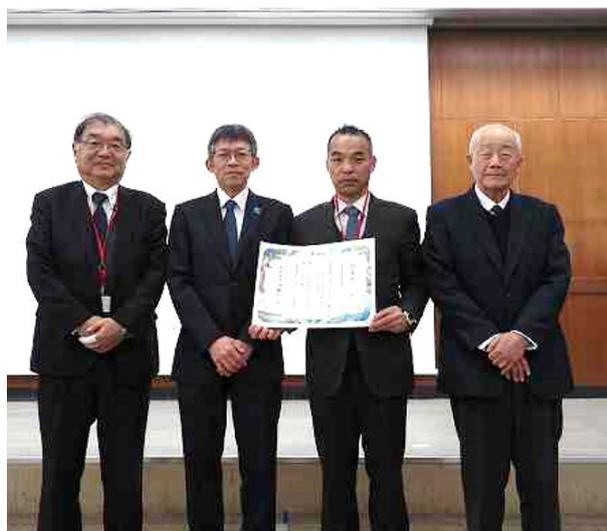
地域ぐるみのアメザリ・バス防除を継続し豊かな自然を次世代へ

2024 年度上期の活動（1～6 月）

昨年6月にアメリカザリガニが条件付き特定外来種に指定され、全国のため池などで本種の防除活動が広がりつつあります。この中で、水辺の豊かな自然を「ため池群」として保全する新たな保全方式が注目されつつあります。

自然共生サイト認定

3月22日に旧品井沼周辺ため池群が環境省自然保護区「自然共生サイト」に認定されました（下写真）。指定されたため池群は、大崎市鹿島台の山谷・広長地区の里山に点在する農業ため池です。2002年からブラックバス防除、2014年からアメリカザリガニ防除活動を継続しています。これらのため池にはシナイモツゴとゼニタナゴ等品井沼に生息していた貴重な淡水魚が生息しています。およそ、100年前から、地域住民により生息環境が保全され、20年前からは当会を含む地域ぐるみの外来種防除により好適環境が守られてきました。さらに、当会は絶滅が危惧される魚類の危険分散と遺伝的多様性保全を目的に、ため池群として保全する方式を提唱し実践してきました。これらの活動と成果により保全対象のため池群が自然共生サイトとして認定され、引き続き保全活動の継続が求められています。今後は、捕獲ザリガニの有効活用と活動コストの削減を図りながら、ネイチャーポジティブ実現を目指す企業と積極的に連携し、ため池群の持続可能な保全方式を確立し、これを全国へ拡大していきたいと考えています。



自然共生サイト認定証授与式（3月22日、東北地方環境事務所にて）

右から高橋理事長、長谷川副理事長、東北地方環境事務所田村省二所長、根元副理事長

今期のアメリカザリガニ防除活動

ため池群では3月からアメリカザリガニ防除活動を開始し、中・小ため池では10～20基の捕獲トラップを4月まで隔週月2回、5月以降は毎週捕獲し甲長を測定しています（写真①、②）。大規模

ため池では4月下旬に30基の連続捕獲装置を小型ボートで再設置し毎週土曜日に捕獲作業を実施しています（写真③、④）。

昨年から3か所の保全ため池では全期間を通して水温が上昇傾向にあり、当歳のアメリカザリガニが例年より多く発生し、小型ザリガニの捕獲量が増加しています。このため、従来の連続捕獲装置に加えて今春から小型専用トラップ計50台を追加で設置し、5～9月は毎週捕獲しています（写真⑤）。

温暖化が継続する中、今後も、小型ザリガニの捕獲量は高水準で推移することが想定されるので、需要の少ない小型個体の有効活用を目指す

必要があります。7月以降、丸ごと食べられる唐揚げ（写真⑥）の試験販売やビスクスープのレトルトパック試作を行い、これまで困難とされてきた小型個体の活用に取り組むことになっています。



①アメリカザリガニ捕獲作業（3月9日）②甲長測定作業（6月1日）
③④大規模ため池の捕獲装置再設置-積み込みと設置作業（3月9日）
③小型専用トラップで捕獲した小型個体（6月1日）
④小型個体の唐揚げ（2023年10月13日）

現地研修会や講演活動-全国的展開と後継者育成に向けて

講演会やシンポジウムで旧品井沼周辺ため池群の取り組みについて講演し、成果を発信しました。1月にはNPO環境生態工学研究所主催の講演会（写真1）、大崎市世界農業遺産推進会議アクションプラン推進会議（大崎市2/6、p4参照）、大崎市ネーチャーポジティブシンポジウム（大崎市3/15）で講演。

全国水土里ネット、水土里ネットみやぎの職員が2月6日に当会と現地ため池群を訪れ情報収集しました（写真②）。後日、農水省URL「ため池の保全管理に関する事例集」の

中で旧品井沼周辺ため池群の取り組みを紹介するそうです。農水省は2022年から各地の地方整備局が農業ため池でアメリカザリガニ防除の実証実験を行っており、この中で防除の成果を確認しつつあります。生物多様性保全における農業ため池の役割は極めて大きいので、今後も引き続き保全方法等の情報を共有できればと考えております。

5月21日には環境省自然環境計画課長と東北地方環境事務所職員が現地ため池群を訪れ、アメリカザリガニ防除による魚類、二枚貝、水生昆虫の復元状況を見学しました（写真③）。

6月25日には古川黎明中学校（大崎市）の20名がため池群を訪れ、アメリカザリガニの捕獲を実習し、復元生物を観察しました（写真④）。



①NPO環境生態工学研究所講演会で講演（1/13仙台市）
②全国水土里ネット・水土里ネット宮城等（2/6公民館）
③環境省自然環境計画課、東北地方環境事務所（5/21ため池群）
④黎明中学校・高校（6/25ため池群）

大崎市世界農業遺産推進会議アクションプラン委員会(2月6日)

20年間の活動成果と今後の取り組みを2分間スピーチで紹介

理事長 高橋清孝

●シナイモツゴ郷の会は里山のため池でブラックバスとアメリカザリガニの退治を20年間続けています。下記資料の左側がブラックバス、右側がアメリカザリガニの取り組みとその成果です。



ブラックバス防除:地域ぐるみで2002年~継続中








シナイモツゴ ゼニタナゴ
ギバチ ミナメダカ ニホンウナギ

里山ため池と周辺小川で絶滅危惧魚類を復元保全

新技術の開発・実践	農業者・里親小学校との連携	里山ため池の生態系復元・保全に成功	有効活用の実用化で長期継続
-----------	---------------	-------------------	---------------



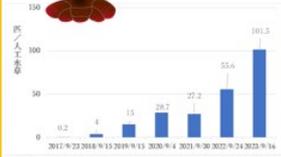


アメリカザリガニ防除:地域ぐるみで2014年~継続中





連続捕獲装置 人工水草 小型専用トラップ



トンボ類ヤゴが急増



よみがえった生き物たち

里山ため池で在来の貝類、魚類、水生昆虫、両生類等を復元

自然共生サイト認定 企業との連携 全国15万個のため池へ拡大

「自然共生サイト」とは、「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を国が認定する区域のことです。認定区域は、保護地域との重複を除き、「OEEM」として国際データベースに登録されます。

●ブラックバスについては、シナイモツゴ郷の米づくり手の会など地域の方々と共に、池干しによる完全駆除を2002年から2015年まで10年以上継続し、バスを里山から一掃しました。この結果、シナイモツゴ、ゼニタナゴ等多くの魚類が復元し、下流の小川ではなんとニホンウナギもたくさん見られるようになりました。

●アメリカザリガニの防除は2014年から本格的に取り組み、効率的な捕獲ツールを新規に開発し、だれでも簡単に大量捕獲ができるようになりました。2~3年間大量捕獲を続け低密度にすると、二枚貝、ゼニタナゴ、シナイモツゴ、アカガエル、多くの水生昆虫、特に全滅寸前だったトンボ類ヤゴが急増しました。

●この方式は簡単で誰でもできます。しかし、長期継続には資金が必要であり、企業などからの支援を受けやすくするために自然共生サイト登録を申請しました。

●里山のため池は、全国に15万個もあり、ここにしか住めない絶滅危惧種がたくさん生息しています。これまでは、ため池の生態系を復元・保全する現実的な手段がなかったため、当会の取り組みと成果は環境省と農水省の両方から注目されています。旧品井沼周辺のため池群では、農業者の適切な管理により、他では見られない、極めて見事な生態系が100年以上にわたって維持されてきました。豊かな自然を次世代へ継承するため、近年、新たな課題となった外来種防除を総合的かつ積極的に進めます。

4年ぶり会場開催 令和6年度総会

理事 浅野功

令和3～5年度総会をコロナ感染予防対策の観点から、会員皆様のご理解とご協力いただき書面により総会を行ってきましたが、ようやく令和6年度総会を会場開催することができました。総会の概要についてお知らせいたします。

- 1 開催期日と場所 令和6年2月17日（土） 大崎市鹿島台尾梶会館
- 2 出席状況 会員総数44名の内、委任状を含め39名が出席となり総会成立
- 3 議案審議について
 - 1号議案 令和5年度事業報告と収支決算 2号議案 令和6年度事業計画と予算案
 - 3号議案 助成金獲得などに伴う予算案の変更の取り扱いについて
 - 4号議案 融資限度額について 5号議案 役員改選について

主な審議内容

- 1) 令和5年度事業報告と収支決算及び令和6年度事業計画と予算案について
事業等の詳細についてはシナイ通信等ご覧いただきます。

	・令和5年度収支決算額	・令和6年度収支予算額
収入額	5,959,516円	4,154,000円
支出額	4,346,064円	4,154,000円
(内事業費	4,126,523円)	(3,500,000円)
残 額	1,613,452円*	0円

(残額は令和6年1～3月の助成事業年度末事業費を含み、6年度会計予算へ繰越)

- 2) 任期満了に伴う役員改選について

定款第14条に従い理事、監事を選出しました。理事について従来の理事16名と、新たに君島裕介氏が選出され17名となりました。

さらに、4月1日開催の新理事による理事会において理事長 高橋清孝氏、副理事長 根元信一氏、副理事長 長谷川政智氏が選出されました。



シナイモツゴ里親活動支援 稚魚回収、卵から飼育開始、特別授業で豊かな自然の大切さを学ぶ 温暖化により産卵時期が変動、卵提供時期の再検討が課題

高橋清孝

5月中旬から里親小学校の大崎市立鹿島台小、美里町立小牛田小、東松島市立鳴瀬桜華小、石巻市立開北小の4校と活動計画の打ち合わせを開始し、今年も各校へシナイモツゴ

本株式会社宮城工場も長年里親として放流用シナイモツゴ稚魚の飼育に取り組んでいただいています。

一方、産卵ポットを設置してシナイモツゴ

稚魚の飼育を委嘱することになりました。5月下旬から里親たち対象の特別授業を皮切りに、シナイモツゴ稚魚の回収、飼育池掃除、グリーンウォーター（GW）とシナイモツゴ卵の搬入などを実施し、シナイモツゴ稚魚の飼育を開始しました。特別授業では、シナイモツゴとゼニタナゴ保全活動、連続捕獲装置や人工水草等の自然再生ツール、シナイモツゴ卵、アメリカザリ



シナイモツゴ里親小学校の取り組み

鹿島台小	5/28	②稚魚の取り上げ	鳴瀬桜華賞	5/21
③飼育池へグリーンウォーターを投入	鹿島台小	6/2		
④特別授業 捕獲ザリガニの観察	石巻市開北小	6/10		

ガニ等の実物を見てもらい、シナイモツゴの特異な生態と飼育の面白さを実感してもらいました。6月26日に里親たちが一年間育てたシナイモツゴ400尾をブラックバスを退治したため池へ放流することができました（P7参照）。各里親小学校の先生方と児童の皆さんには、様々な活動へ積極的にご参加いただきました（写真①～④は里親小学校の活動風景）。

また、仙台うみの杜水族館とケミコン東日

の卵を採取している里山の繁殖ため池では、温暖化による水温上昇により、産卵時期が3旬程度早まっており、全体の採卵数が例年の1/5程度に減少しています。平均気温が継続して上昇傾向にあることから、産卵の早期終了は今後も有り得るので、里親への卵の提供時期などについて再検討が必要になっており、来年度の大きな課題となっています。

シナイモツゴ里親放流会

小学校・企業里親 100 名が計 400 尾を放流

根元信一（シナイモツゴ郷の会）

絶滅危惧種シナイモツゴを守り、その生息池を拡大する目的で、県内の小学校と企業に里親を依頼し、卵から一年間育てたシナイモツゴ稚魚を安全なため池へ放流しています。今年 は 6 月 26 日（水）午前中に開催、総合的学習時間の一環として鹿島台小学校 4 年生 57 名と小牛田小学校 24 名（写真①、②、③）、さらに、東日本ケミコン宮城工場とうみの杜水族館職員が参加し放流しました。



シナイモツゴ放流会6月26日 大崎市鹿島台の里山のため池、鹿島台小57名、小牛田小24名の里親が県内4小学校と2企業が育てた300尾のシナイモツゴを放流

放流ため池は、2015年までに池干しによるブラックバス退治を行った保全池で、今年3月に環境省指定の自然保護区「自然共生サイト」に認定された旧品井沼周辺ため池群の一つです。周辺の保全池を含め、7か所でシナイモツゴが生息し繁殖しています。

放流後にシナイモツゴ郷の会会員がシナイモツゴの減少原因や保護の方法などについて説明し、里親小学生からの活発な質問もありました（写真④）。

以下は当日、放流会に参加した団体と機関です。

鹿島台小（4年生児童 57名・職員 5名）、小牛田小（4年生児童 24名・職員 2名）、シナイモツゴ郷の会、シナイモツゴ郷の米づくり手の会、広長地区行政区、山谷地区行政区、広長地域資源保全隊、大崎市世界農業遺産未来戦略室、大崎市鹿島台公民館、鶴田川沿岸土地改良区、JAみやぎ、仙台うみの杜水族館、ケミコン東日本宮城工場、報道機関

2023 年度水辺の自然再生ミニシンポジウム・地域研修会

里山里地水辺の自然再生と保全活動

アメリカザリガニとブラックバス退治の成果と課題

会場 尾幌会館（大崎市鹿島台平渡字上戸下 27-6： 鹿島台小学校付近）

期日 2024 年 2 月 17 日（土） 14：30～17：00

主催 NPO 法人シナイモツゴ郷の会、旧品井沼周辺ため池群里山未来拠点協議会

次 第

趣旨説明 シナイモツゴ郷の会理事長 高橋清孝

講 演

- 1) ブラックバス防除でよみがえった里山ため池と小川の魚たち
君島裕介・君島奈々恵・高橋清孝（シナイモツゴ郷の会）
- 2) アメリカザリガニ防除でよみがえった里山ため池の水生昆虫など貴重な生き物たち
佐伯光広・長谷川政智・高橋清孝（シナイモツゴ郷の会）
- 3) 鹿島台里山小河川の環境 DNA 調査でわかったこと
黒川優子（東北生活文化大学短期大学部）
- 4) 担い手育成プロジェクト「大崎生きものクラブ」の成果
三宅源行（大崎市世界農業遺産未来戦略推進室）
- 5) 水族館の役割とその取り組み-ホテルの保存やザリガニの餌利用などについて
相沢真哲（仙台うみの杜水族館）
- 6) カムルチー等による野鳥への影響
船橋玲二（NPO 田んぼ）

趣旨説明

アメリカザリガニとブラックバス退治で水辺の豊かな自然を復元しよう

10～20 年前はブラックバス対策が主課題でしたが、近年は多くの外来種による被害が多発し、多様な対策が求められています。水中では、複数の外来種が相互に激しく競争しながら生育しています。今や、単一種の防除では十分な成果を上げることができず、複数種を対象とした総合的防除を検討する段階に入っていると考えられます。当会では、2002 年からブラックバスを、2014 年からアメリカザリガニを継続して防除しています。

主題のアメリカザリガニについては、昨年 6 月に条件付特定外来生物に指定され、各地で防除活動が始動しました。当会がアメリカザリガニの防除活動を継続している



里山ため池でアメリカザリガニ退治後よみがえった生き物たち

- ①ニ枚貝(タガイ)
- ②ゼニタナゴ
- ③シナイモツゴ
- ④アカガエル
- ⑤ヌカエビ
- ⑥エグリトビケラ
- ⑦トンボ類ヤゴ
- ⑧ミヤケムズムシ

ため池では右写真のように様々な生き物がよみがえっています。全国 15 万個のため池のほんの一部でも、適切な防除が行われれば、さらに多くの生き物を復元できます。

本シンポジウムでは、両種の防除による在来生物の復元状況を紹介し、今後の自然再生の在り方を議論します。そして、里山水辺の豊かな自然を復元する新たな方式を提案します。

総合討論

座長 高橋清孝

講演のまとめ

本シンポジウムでは多様な報告がありました。当会の君島氏と佐伯氏が報告したように、鹿島台の里山ではブラックバスとアメリカザリガニ防除により両種を根絶あるいは減少させると、色々な生き物がよみがえってくるようになりました。今後この方式を全国的に拡大していければと考えております。東北生活文化大学黒川先生と大崎市三宅氏からは、子供たちの継続的なモニタリングと新しい手法「環境 DNA」調査について報告があり、両者を組み合わせ補完し合うことにより、より精度の高いモニタリングが可能になることもわかりました。仙台うみの杜水族館相沢氏からは、減少著しいゲンジボタル繁殖の取り組みについて、減少原因や独自の手法に興味深く、大変貴重であると思いました。NPO 田んぼの船橋氏によるカムルチーに関する報告では、野鳥が捕食されている実例を紹介いただきました。これは、私たちにとっても非常に密接な話題で、ザリガニ防除において捕獲が難しく人手と経費がかかる等、という理由でカムルチーを導入するのは、かなり危険かなと思っています。カムルチーを導入しザリガニが減少すれば水生植物が増える可能性はありますが、カムルチーはその植物を集めて巣を作り産卵を開始する可能性があります。繁殖個体が大下流の水域に流下すれば、ブラックバスと同様に稚魚の供給源になり、深刻な悪影響を及ぼす恐れがあります。それらの影響評価が不明な現段階では、安易な導入は避けるべきであり、技術開発を含めた地道な対策が必要ではないかと考えております。



①趣旨説明：高橋氏 ②講演：君島氏 ③講演：黒川氏 ④講演：三宅氏
⑤講演：相沢氏 ⑥講演：船橋氏 ⑦総合討論風景 ⑧講評：池田氏

質疑

(東北大 池田教授)

黒川先生の環境 DNA 調査の結果ではスズキが出現しているが、調査点は河口からどれくらい離れています

か。また、生活排水の影響はなかったのでしょうか？

(高橋理事長)

この川は、吉田川の下を潜り、松島の里山のトンネルを直線的に流れ、最終的に松島湾に流れ込みます。距離はせいぜい 20km 程度です。そのため、スズキとかウキゴリとかが、出現してもおかしくありません。さらに、ニホンウナギも川にのぼってきますが、特に、消滅前の品井沼はウナギの好漁場であり、現在も相当数の稚魚が川へ遡上すると考えられます。

生活排水は流入しますが、食卓に上がりやすい海産魚は検出されませんでした。流域の世帯数が少ないためかもしれません。

(高橋理事長)

本日、お越しいただいている 2 行政区の区長さんは、ため池の外来種防除作業や小川の生き物観察会へ積極的に参加されております。区長さん方から何か一言お願いします。

(広長地区 吉田区長)

シナイモツゴ郷の会の皆さん方と、20 年くらい前から活動していますが、当初は専業農家が多く、昼間の人口も結構多かったです。バス退治したため池へのシナイモツゴ稚魚放流とかブラックバスの駆除をやったりするなかで、20~30 人が集まり懇親会までできたんですが、今は殆どできません。私自身も、そういった絶滅危惧種の保護などの環境保全については基本的には地域が守る部分であり、それによって地域の農業も支えあって生きることができるという考え方で、動いてきました。最近、専業農家が減少し、地域の昼間の人口が 20 年前の 1/3 程度になって色々な活動が日曜日に集中するようになりました。このような中で、地域の色々な活動をしていく上で、やはり農業そのものできちんと生活できるくらいの収入にならなきゃダメだなと、特にこの頃、感じております。経済的な農業のウエイトが少なくなり、専業農家中心に地域全体を守っていくということが非常に苦しくなっています。

水田の圃場整備が平成 17 年に採択になって、昨年、完工しました。地域の農業と生物多様性など自然環境保全の活動を組み合わせながら、一緒になって動いていきたいと、という思いで整備したんですが、何せ農業が今の経済動向に追いついていけないという現実があります。このような側面が地域にはあるということを考えていただければ幸いに思います。まだまだやれる範囲については協力させていただきたいと思っています。一方で、このような厳しい現実の中で、皆様に別な形での連携の在り方についても模索していただければということ、ここ 2~3 年つくづく思うようになってきました。

(高橋理事長)

どうもありがとうございました。ため池保全の担い手である中山間地の農業人口は減少著しく、農業の存続が重要な課題です。里地・里山の豊かな自然を守る活動の重要性を理解してもらい、そのための支援を様々な形で拡大し、担い手である地域の方々が活動を続けられるようにすべきと考えています。まずは、保全対象の自然が全国的にも稀有で、かけがえのない貴重なものであり、さらには、これまでの保全活動と成果が全国から注目されていることを良く理解してもらう必要があります。その上で、保全活動による収入を増やし、生き物ブランドなどで豊かな自然の恩恵を受けやすくする等して、今後も長期にわたり里山ため池の保全に関わってもらえればと思っています。

(山谷地区 佐藤区長)

桂沢ため池のある山谷行政区区長です。よろしく申し上げます。私は今年からザリガニ退治に参加しています。昔、40~50 年前は、当地区にザリガニはいなかったんです。それがいつの間にかすごい数が増えて、退治してて、こんなにいるのかと思っておりました。さきほどカムルチーの話の中で、カイツブリが減少しているということですが、桂沢ため池では、そんなカイツブリが、ザリガニ駆除をしていると、たまに見かけます。

また、ホタルも当地区では、普通に見受けられますし、ツチボタル（陸生ホタルのクロマドホタルか？）もいます。当地区の自然は、他地区に比べ、まだまだ自然が残っているようだ、今日の講演を聞きまして感じた次第です。ありがとうございました。

（山谷地区住民）

私も水族館の方と一緒にホタルの採取をしたことがあります。その時、当地区で採ったホタルを繁殖させて、保全していくという話を聞きました。当地区では生き物調査を行っており、その中で、メダカも採集されますが、他に比べ大きいようであり、他地域のメダカと交雑させてはいけないということを、聞いたことがあります。ホタルも、交雑しないようにして、このまま繁殖させていただけるということで、大変いい話を聞いたと思います。

（高橋理事長）

山谷・広長地区には、素晴らしい自然が残されています。中には今日も写真をお見せしましたが、他のところでは絶対見られないような光景を今でも間近に見ることができます。これらの情報をどんどん発信し、みんなで情報を共有し、他地域や企業の皆さんとの連携を深めながら地域ぐるみで保全していければと考えています。

（東北大 池田教授：講評）

皆さん、お久しぶりです。おそらく、ミニシンポ・地域研修会に参加するのは、コロナが始まった時以来 4 年ぶりになると思います。このミニシンポ・地域研修会では、シナイモツゴ郷の会の活動以外にも、その他の場所、場所で頑張っている方々の成果を、聞かせていただくことができ非常に勉強になりました。お話を伺えた先生方、どうもありがとうございます。私自身は水産生物の多様性、特に遺伝的多様性に関する研究を進めており、保全とか管理に関わる、アクティビティもおこなっております。そういった中で、2023 年、去年の一番のトピックは、アメリカザリガニが条件付きとはいえ、特定外来生物に指定されたことだと思います。野球だったらメジャーリーグ、サッカーだったら J1 昇格おめでとうみたいな感じですが、アメリカザリガニが特定外来生物に指定されたのも、このシナイモツゴ郷の会の皆さんの、ザリガニの被害報告、あるいは、防除活動、そういったことが認められて、このような状況になったと考えています。そういった防除活動というのも、これから各地で盛んになっていくと思いますが、この会の活動が、お手本になっていくんじゃないかと、思いました。それから、保全に関する世界的な潮流として今話題になっている中で、大事なキーワードとして、「ネイチャーポジティブ」があります。これは日本語で「自然再興」あるいは、「自然本意主義」と言い換えてもいいと思います。これはどういうことかということ、生物多様性のみならず、それを支えている水とか、土、それから空気等、そういった一切も含めた生態系、そういった物を自然の資本と捉えて、その損失を最小限にとどめて、回復軌道に乗せるというものです。これは、自然保護活動あるいは環境保護団体に限ったアクティビティではなくて、こういった自然の資本からサービスを受けている企業がそういった活動を行なっている団体を積極的に支援する、あるいは、企業そのものが保全活動に関わっていくというものです。そのようなアクティビティをしないと、企業そのものも認められなくなってくる、投資家がお金を投資しなくなってくるような時代になってくるわけです。こういった流れの中で、シナイモツゴ郷の会の活動、それと本日の発表も含めて、眺めてみますと、鹿島台という非常に小さなエリアではありますが、生物多様性保全そのもの以外に、科学的な新知見ですとか、教育啓発活動、それから農産物のブランド化ということで、非常に良い循環を生み出しているわけです。企業はこういった自然環境保全の活動に大きなウェイトを割きつつあり、討論の中で吉田区長さんからご苦勞のお話を聞きましたが、これからそういったネイチャーポジティブ関連の指定を受けていけば、非常に良い打開策が見つかるのではないかと私は思いました。シナイモツゴ郷の会の活動というのも、そういった意味での先駆的なロールモデルになるだろうと考えながら、今日の発表を聞かせていただきました。

手前味噌でもあるんですけども、私たちの研究室は女川町にあります。少し新しい機械が導入されまして、これからまたさらにお声がけをいただいでですね、何らかのご協力をさせていただければなと思っております。ちょっと長くなりましたけども、ご挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

理事就任のご挨拶

君島 裕介

4月より新たにシナイモツゴ郷の会の理事を拝命いたしました君島裕介（きみじまゆうすけ）と申します。福島県いわき市出身で、北海道や東京で水族館や自治体に勤務したあと、宮城県には2021年から暮らし始めました。

かねてから里山の生態系保全に興味があり、仕事以外でも携わりたいと思い、郷の会の活動には宮城に引っ越してきてすぐから参加させてもらいました。宮城という土地には全く縁がなかったので、知らないところで活動に参加するのは結構チャレンジでしたが、今となっては郷の会、鹿島台、どちらも自分にとって落ち着く第2の故郷といった気持ちを抱えています。



今回、会の中ではまだまだ新参者、若輩者の私に理事という役割をさせていただいた理事長、理事、会員の皆様に深く感謝申し上げます。

郷の会の活動がもっと多くの人の共感を得て、行動を促し、輪が広がっていくような取り組みを推進していきたいです。

自分のできることを精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

J-STAGE へのシンポジウム要旨の掲載について

君島 裕介

今年の2月17日に尾幌会館にて開催した「2023年度水辺の自然再生ミニシンポジウム・地域研修会」の要旨集について、J-STAGEでの公開を開始しました。掲載による効果は大きく、公開日（3月29日）から累計で合計1,714件のアクセスがありました。（6月14日22時時点）

J-STAGEにはアクセス解析の機能があり、それによると、国内からのアクセスは743件で、アクセス数の半分以上は海外から参照されていたことがわかりました。アクセス数の多い順にアメリカ、ドイツ、オランダ、大韓民国、香港など、多様な国や地域から当会の活動が参照されたことになります。

当会の活動として、里山の生物多様性保全のための技術普及は重要ですので、今後もこういったサービスを活用し、必要な人の元に必要な情報が届くよう取り組んでいきます。



掲載 URL <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sscawnrjs>

移動研修会に参加して

長谷川 政智

令和6年5月18日の移動研修会に参加してきました。今年の研修先は、岩手県陸前高田市です。陸前高田市にある陸前高田市立博物館を見学してきました。この地域は大震災の津波の被害に遭われ博物館も同じでした。ようやく展示物などの修復が進み現在は新しくなって開園されています。この博物館は貝の標本が多いことで楽しみにしていました。館内に入るとガイド役の学芸員の方が館内を面白く説明してくれました。館内正面には資料の復元途中の様子も見られます。開館するまですごい労力だったことが実感できました。館内は貝だけでなく魚の展示や昆虫などの標本などもあり楽しく巡回できます。また、高田市の



館内の説明をして下さった学芸員の方



資料復元作業などを見学



斬新な魚類の展示コーナー



博物学者の鳥羽源蔵氏や朝ドラ主人公モデルの牧野富太郎との関係など興味深く話を聞くことができました。世界各地の貝の展示は 2000 点



もあり見ごたえ十分で、展示のきれいさも圧巻でした。今回の研修での時間ではじっくりと見ることができなかったので、今度は一人で見に行きたいと思います。昼食後は物産館と近くに

ある奇跡の一本松を見学してきました。テレビでは見ていたものの実際目の前でみて、自然の驚異や力強さを感じました。今回企画してくれました方々、管内の説明をしていただいた職員の方々、本当にありがとうございました。



アメリカザリガニ退治に参加して

宮路憲昭

昨年より、シナイモツゴ郷の会のザリガニ防除活動に参加しています。仕掛けた捕獲装置の引き上げ、ザリガニ回収、記録、ザリガニの餌補充、捕獲装置再設置、頭胸甲長測定作業という流れです。餌はドッグフードと米糠。設置場所によって沢山獲れるところと、そうでもないところがあります。以前からの防除活動によってザリガニの数は減っているようですが、捕獲装置1台当たり数尾～50尾前後入っています。繁殖力が旺盛な生き物なので根絶は難しく地道に防除活動を続けるしかなさそうです。今年の夏も暑かったですが、人は保冷剤や空調服等により暑さに負けない対策をしていますが、文明の利器を使えないザリガニの方が暑さに強いような印象でした。



アメリカザリガニ捕獲作業（3月9日）と 甲長測定作業（6月1日）

ため池にも暑さの中で清涼効果のあるものがあります。それはオニヤンマ、ギンヤンマ、コシアキトンボ等、都市部ではなかなか見ることのできないトンボたちです。ザリガニ防除によりシナイモツゴ、ゼニタナゴ等は勿論ですが、各種トンボたちも生息数が回復してきているそうです。これからもザリガニ退治を続け、在来生物が回復する様子を見続けていこうと思います。



里山ため池のトンボ ①オニヤンマ ②ギンヤンマ ③コシアキトンボ
撮影 長谷川政智

水辺の仲間たち —その28—

ヒツジグサ

佐藤 豪一

スイレン科スイレン属の多年草で日本全国の山間部の池や沼の水深の浅い所で普通に見られた。繁殖方法がスイレン科の中で特異である。近年、特にアメリカザリガニの食害により、各地の池沼で全滅し、激減している。

分布

北米の一部、ヨーロッパの一部、東アジア、シベリア、インド北部などに広く分布。国内では全土に自然分布。

レッドデータ

環境省の指定は無いが、北海道・東北を除く 29 県で絶滅危惧種に指定している。大崎市では、多くの里山ため池で繁茂していたが、2000 年以降アメリカザリガニが侵入し繁殖したため池で全滅している。

特徴

葉の直径は 15cm 以内で地下茎は球状。開花期は 6~9 月で花の直径は 3~5cm。主に種子により繁殖する。^{ひつじ}未^{ひつじ}の刻(午後 2 時頃)に開花することから名づけられたと言うが、実際は午前 10 時頃から午後 3 時頃まで開花するようだ。

栽培と人工繁殖

本種は当地で激減し生息確認が困難になりつつあることから、域外保存するため栽培と人工繁殖を試みた。

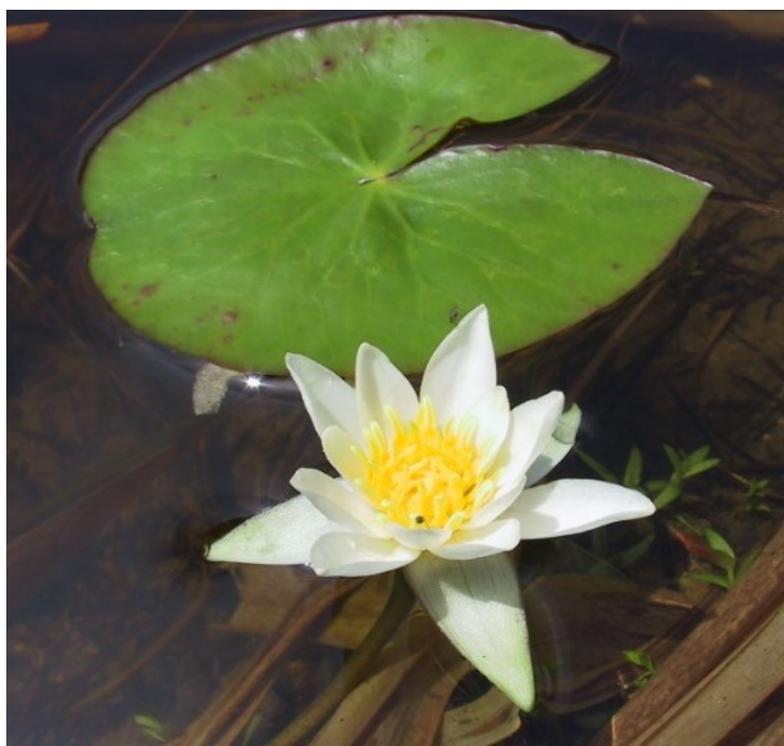
栽培

置き場所は日当たりの良い所。高水温に弱いという記述もあるが、真夏も直射光の当たる場所に置いていた。

3~10 月まで 1 か月に 1 回か 2 か月に 1 回、有機質を含む化成肥料を与えた。成分比は窒素：りん酸：カリウムが 5：5：5。

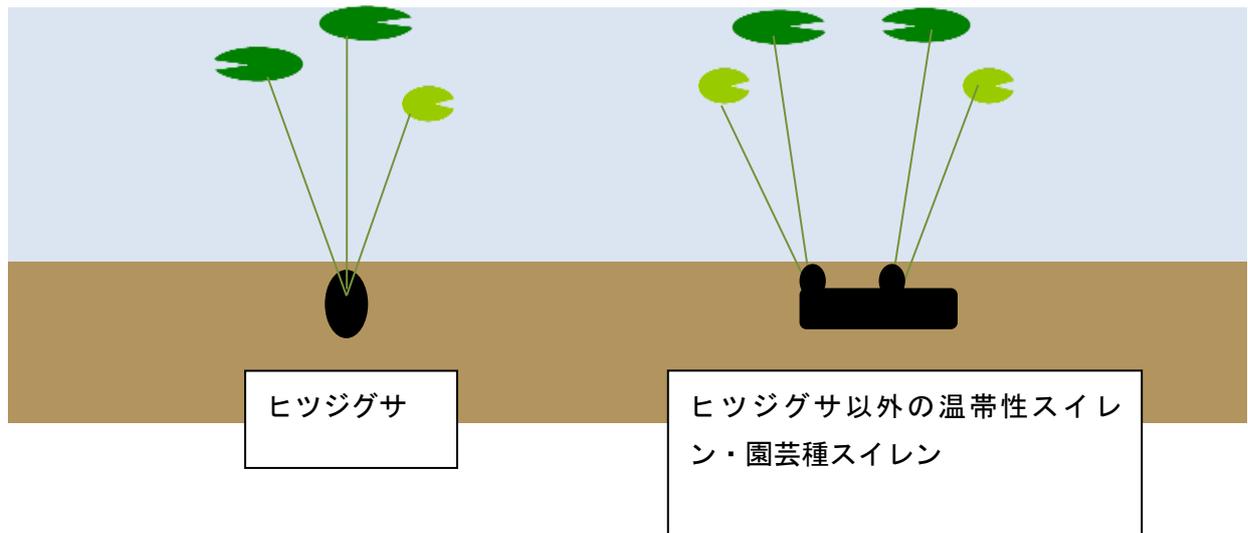
自然下では貧栄養~中栄養の水域に生育するようだ。

年に 1 回、3~5 月にタライの水を全換水。それ以外は水道水の足し水および雨水で補充の



み。

人工繁殖



ヒツジグサ以外のスイレンの根茎は棒状であるため、切り分けて株分けして繁殖できるのに対し、ヒツジグサの根茎は球状であるため、よほど肥大した根茎でない限り株分けでの繁殖はきわめて難しい。

ヒツジグサの花は数日間開花したのち、果実が肥大してきて内部で種子が熟す。熟すと果実からタネが出てくる。最初タネのまわりに半透明のひだが付いておりしばらく水面を漂っているが、じきに水底に沈む。

タネは黒色で楕円形。大きさは約2mm。タネは放置していても良く発芽するようで、親株が植えてある鉢にこぼれ種がたくさん発芽する。発芽して水面に浮いていた子株を土へ植え付けて育てることもできる。親株の鉢の近くに、土をいれた鉢を沈め設置することにより、新たな株を育てることができそうだ。しかし、水槽内でカエル（ニホンアマガエルあるいはシュレーゲルアオガエル）が産卵してオタマジャクシが発生することがあり、発芽直後のヒツジグサの新芽を食い尽くすことがあるので、注意が必要である。



シナイモツゴ BCC 通信 362 号 (自然共生サイト & ザリガニ TV 放送)

(2024 年 3 月 26 日配信)

**会員の情報共有のための配信メール (1~3 回/月) です。
受信ご希望の方はご連絡下さい。**

シナイモツゴ BCC 通信 362 号

皆様

おはようございます。

「旧品井沼周辺ため池群」が環境省の自然保護区「自然共生サイト」が認定され、3/24 に里山ため池で実施したアメリカザリガニ防除活動をミヤギ TV が取材し放映しました。ザリガニ退治の様子と増えた生き物として今回はジュズカケハゼとエグリトビケラが映像で紹介されました。

下記、アドレスで活動風景などの動画を見ることができます。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/4f34ef0c1d70b09a5f1e1451cf455f6d50fe38ae>

(その後、この動画は削除されました。)

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。
小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。